

ガイト・ガズダーノフと「現代雑記」

——ナボコフとの比較の視点から——

諫 早 勇 一

雑誌「ロシアの意志」Воля России で活躍した批評家セルゲイ・ポストニコフが「最近号になってようやく「現代雑記」の扉が少しばかり若い作家たちに開かれた¹⁾」と語ったのは1927年のことだった。ただ、そこでその例としてひかかれているナボコフ（当時のペンネームで言えばシーリン）の短篇『恐怖』Ужас の掲載はナボコフにとってもあくまで例外的なものであり²⁾、本格的なナボコフの「現代雑記」Современные записки へのデビューは1929年の40号から始まる『ルージンの防御』Защита Лужина を待たねばならない。これに対して、ガイト・ガズダーノフが将来を囑望される若手小説家として「現代雑記」に掲載を許されるのは更に2年遅れた1931年のことであり、その記念すべき第一作が45号掲載の『リカルディの失踪』Исчезновение Рикарди だった³⁾。以来ガズダーノフは『幸福』Счастье (1932—49号)、『第三の生』Третья жизнь (1932—50号)、『鉄のロード』Железный лорд (1934—54号)と短篇を発表し、1934年の56号から連載を開始した長篇としての第二作『ある旅の物語』История одного путешествия の最終号(1935—59号)では、遂にそれが「現代雑記」の巻頭を飾るまでに至っている。（ちなみに、「現代雑記」の巻頭は1920年代前半はブーニン、レーミゾフ、ザイツェフ、シメリョフら亡命前に既に名をなしていた作家たちの作品で飾るのを常としていたが、1934年の56号ではナボコフの『絶望』Отчаяние が彼の作品としては初めて巻頭に抜擢されている⁴⁾。）そして、この号でガズダーノフのすぐ下に名を連ねている作品がナボコフの『死刑への招待』Приглашение на казнь であることからわかるように、当時ガズダーノフは亡命の若手作家の中でナボコフに勝るとも劣らない評価を受けていた。即ち、第一の長篇『クレアとの夕べ』Вечер у Клэр (1930)の成功によってその才能を認められてから、1934—35年の第二長篇『ある旅の物語』に至るおよそ4年間は、ガズダーノフの作家としての名声が頂点に登ろうとしていた時期と言えるだろう。そこで、本稿では前稿⁵⁾をうけて、「現代雑記」へのデビューから第二長篇に至るまでの4つの短篇を概観し、とくにナボコフとの比較の視点からその特質を検討して行きたい。

先ばしった言い方をすれば、『最初』Начало（「現代雑記」1934年56号掲載に際してはこの題名が用いられたが、後に58、59号掲載の『ある旅の物語』とまとめられ、長篇小説の冒頭部分とされた）の次の一節はこれらの短篇を考える上での手がかりを与えてくれる。コンスタンチノーブルから旅立つ主人公ヴォロージャは自分を次のような人種だと考える。

「彼は思った。自分はこんな人種に属しているのではないかと。運命は自分たちに何か余分なもの、重たいものを与え、絶えず自分たちを押しつけ、自分たちの動きを圧迫する。そして、現在すなわち自分たちの生きている今は偶然で誤解に過ぎないと思わせる。自分

「私たちは一生の間、無意識のうちに何かを待っているが、何がおころうともそれは期待していたものではない。結局自分たちはこの期待を抱いて死んでいく運命にあるのだ。」(1934—56, ctp. 187, なお傍点は引用者、以下同じ)

そう、これらの短篇に描かれた主人公の多くは自分たちの現在の生活を打破してくれるものを知らず知らず待ちうけているのかも知れない。しかし、突然彼らの生活に襲いかかり、彼らの生活を急変させるものは決して望み通りの方向に彼らを導きはしない。いや、多くの場合正反対に彼らを不幸のどん底に突き落とすものだ。『リカルディの失踪』の主人公である世界的名声を馳せた音楽家リカルディは、ある5月半ばの日、気にかけていた湿疹がハンセン病の徴候だと後をつけてきた若い男から告げられる。そして、かつて友人だった医師から最後通告を受け、恋人にも秘したままひそかにアフリカへ旅立つ。『幸福』の主人公である少年アンドレ・ドランの父アンリも、不実な妻に悩まされていたある日キニーネの飲み過ぎで意識を失い、回復後も永久に視力を失ってしまう。

だが、プロットだけを追えば、これらは突然悲惨な運命に襲われる不幸な物語ではあるが、物語を覆う全体的なトーンが暗鬱なものかと言えば必ずしもそうではない。例えば、視力を失い、一旦は家族から孤絶した思いに苛まれるアンリ・ドランは、ある夢を見た翌朝、不思議な変化を感じる。一体何が変わったのか、それは定かにはわからない。だが、彼はこう自問する。「そう、私は多くの悲しいことを聞きもせず、知りもしないのに幸せだった。そしてこうしたことを知った今、私は幸せではなくなったのだろうか」と。答えは否だ。結局のところ「災難も裏切りも大したことではない」(1932—49, ctp. 201)のだから、とこの物語は題名通り「幸福」の讃歌に終わる。とは言え、この幸せは決して晴れ晴れとしたものではない。いわばほろ苦さと表裏一体になった幸せ、いつ何時また旧に復してしまうかも知れない、おぼつかない幸せではなかるうか。そして、このいつ何時逆転するやも知れない幸せと不幸、甘さと苦さの奇妙な混在は、次に見る『鉄のロード』の特徴ともなっている。

『鉄のロード』の枠組は Dienes も指摘するように⁶⁾、明らかにブルース的なものだ。語り手はある日バリの町を歩きながら、地面に置かれたおびただしい数のバラの花に眼をとめる。するとやがて、かつて同じように沢山のバラの花を見た記憶が蘇ってくる。バラの香りが記憶を蘇らせるという手法がブルースの『失われた時を求めて』A la Recherche du Temps perdu (1913—27) を踏まえていることは疑いなく、こうした個所を見る限りでは、ガズダーノフがユーレイ・フェリゼンらと並んでブルースの追隨者と呼ばれていた⁷⁾のも無理からぬところだろう。

それは語り手が8才の時のことだった、とここで舞台は革命前のロシアへと移る。そこで語り手は父の友人で、「法律家かつ数学者で、40がらみの背の高い男で、いつもただ眼だけ笑っている、異常なほど清潔な」(1934—54, ctp. 165) ヴァンリイ・ニコラエヴィチ・スミルノフという人物と知り合う。彼には19になる娘と、エレナ・ヴラシエヴナという夫人、更にロードという名前の20才くらいのポインターがいるが、どうやら家庭はうまく行っていないらしい。そして、彼は控え目だったが、反対に夫人は「静粛とは無縁」(ctp. 166)のけたたましい女性で、些細な出来事にも過剰な反応を見せ、周囲のひんしゅくを買っていた。ところが、そんな一家の生活が愛犬ロード(今では老いぼれてしまったが、かつては力強い

猟犬で「鉄のロード」と呼ばれていた)の死をきっかけに急変を見せる。ロードが死んで行く最後の三日間、あの清潔好きのスマルノフと一緒に埃だらけのじゅうたんに横になりながら、犬に話しかける。「私たちは死んで行くんだね、鉄のロード。ちょっと待ってはくれないかい？ 駄目かい？」と。スマルノフは更に続ける。「お前はあんなに強かったじゃないか、ロード。トヴェーリ県の狼を覚えているかい？ シベリアを覚えているかい、ロード？ お前は私の一番古い、一番いい友達さ、ロード。待っておくれ、ロード。行かないでくれ」(стр. 168)——この不思議な言葉の持つ意味は、後になって明らかになる。

が、スマルノフの願いも空しく愛犬ロードは死んでしまった。そして、その死を告げに来た夫人は例によってまたヒステリーをおこし、長年にわたってこのヒステリーを耐え続けて来たスマルノフへの同情は一層強まった。「苦痛にみちた果てしのない受難の、とぎれることのない連続」(стр. 169)を涙ながらに訴えてやまない夫人の口調は、いつも聞く人に滑稽なまでの不信感を与えるばかりだ。彼女のお気に入りの言葉、例えば、「受難」、「偉業」、「犠牲」、「生涯」、「愛のために」、「義務のために」(стр. 173-174)といった言葉は白々しくしか聞えず、なぜスマルノフが彼女との生活を断ち切らないのかは誰にとっても謎だった。

そんな11月初旬のある日スマルノフは不思議な計算書きを持って現われ、数学科を出たのに何度計算しても答えが合わない、真面目とも不真面目ともつかない話をした挙句、暇乞いをして出て行った。しかし、何か踏ん切りがつかないらしく、語り手を見つめて「さよなら、コーリャ」と言ってから、「鉄のロードを覚えているかい」と付け加えた。語り手が「覚えているとも、ヴァシリイ・ニコラエヴィチ」と答えると、「パパによろしくね、さよなら」(стр. 176)と言って彼は姿を消した。そして、それが生きたスマルノフを見た最後になった。スマルノフはそれから鉄道自殺をはかり、そのちぎれた遺体を棺に納める時に、沢山のバラの花がその無残な遺体を覆った。語り手がパリの町で見たバラの花が呼びさました記憶は、こうしてスマルノフの死の思い出につながる。

さて、スマルノフの死後あのエレナは一変する。彼女はとんとヒステリーもおこさなくなるし、若返ったように美しくなって、やがて十才年下の男と再婚する。そして、この奇妙な夫婦の秘密は、死後十年経ったら開いてよいというスマルノフの遺書(小説技法としてはいささか陳腐のきらいもないではないが)によって一切が解き明されることになる。

スマルノフは学生時代にエレナと知り合って結婚するが、その結婚生活の初めは申し分ない程幸せなものだった。二人は当時一才だったロードを連れて新婚旅行に旅立つが、シベリアでもアムール河畔でも二人は生涯またとない程幸せだった。それから任地の中央ロシアへ戻るとエレナは妊娠しており、やがて娘が誕生した。ところが、娘がまだ2ヶ月だったある日、スマルノフは3週間の予定でペテルブルグへ出張に出かけるが、そこで一人の女性と懇意になって誤まちを犯し、不幸な病いまで負ってしまう。以来スマルノフは一切を秘したまま同じ屋根の下で一人離れた生活を営み始め、医者に完治を宣告された後も決して妻や娘に触れようとしなかった。エレナは夫の急変の訳はわからぬものの、彼が死ぬまでは離れないことを誓うが、当然のように家庭の雰囲気は耐え難いものになる。そんな崩壊して行く家庭の中で唯一変わらないのが愛犬ロードだった。今やスマルノフにとってロードだけが、(もし犬に記憶があるならば)エレナと過したシベリアの幸せな時を保持している唯一の存在だった。スマルノフはこう書いている。「残っていたものはたった一つ犬の記憶だけだ

ったが、それさえもロードの死とともに消えてしまった。その日私も一緒に死ななければならなかった」(стр. 182)と。ロードの死とともにあのかつての幸せを蘇らせることは永久に不可能になったとスマルノフは考えて、自らの生命を断つことを決心し、予め選んでおいた場所で列車に身を投じたのだ。

以上『鉄のロード』のプロットをやや詳しく追ってみたが、先に述べたように、いつ何時逆転するやも知れぬ幸せと不幸がここでも中心をなして流れていることは納得できよう。そして、人生に突然襲いかかる予期せぬ出来事が、人の一生をとり返しがつかない程変えてしまうという人生観は、この作品にも明瞭に見てとれる。だが、その急変の後にもスマルノフは何かをずっと待ち続けていたのかも知れない。例えば、彼は自分の頭を混乱に導く不思議な数字の列と必死に格闘するが、その格闘の中でこう思う。「この数字が突然の気遣いじみた幸せの力で、実際に何が必要なものにも変わるかも知れない。そうすれば、自分がひどい間違いを犯していたことが明らかになり、おそらく死ぬ必要もなくなるだろう」(стр. 184)と。しかし、彼の淡い期待も空しかった。彼を待ちうけていたものは結局、「鉄のロード」の死と、続く自分の死の運命だけだった。彼はやはり空しい期待を抱いて死んで行かなくてはならない。ちょうど『最初』のヴォロージャの独白のように。

だが、この作品を考える上でこの「空しい期待」とともに重要な語は「犬の記憶」という言葉ではなからうか。ガズダーノフの作品の多くが記憶のテーマと密接につながっていることはたびたび論じられている事実であり⁸⁾、先に触れたように、それは時としてプルーストの模倣ともみなされている。しかし、ガズダーノフの記憶への固執はナボコフの記憶への固執に似て、単なるプルーストの模倣と言うよりはむしろ失われた祖国ロシアの記憶、現在のデラシネの身を支える根源にあるもの大切な記憶と分かち難くつながっており、より作家の本質にかかわるものと考えべきだろう。その意味で、「犬の記憶」という語について考えることは決して無駄ではあるまい。

「犬の記憶」、それは撞着語法と言える程矛盾を含んだ言葉だ。おそらく、犬に、それもまだ一才にしかならない犬に人間と同じ様な記憶が備わっているとは、それをあてにするスマルノフ自身信じてはいないだろう。その意味でこれは非現実的概念、ありえない概念と言える。しかし、同時にこれはスマルノフにとってはあってほしい概念、いや、なくてはならない概念でもある。なぜなら、そこで保持されたものだけが、現在の崩壊してしまった家庭、崩れ去った人間関係を過去のままにつなぎとめる可能性を秘めているのだから。とはいえ、よし犬に記憶があったにせよ、それは他者に伝達しうるものではない。言いかえれば、それは他者に働きかけ、他者に何らかの作用を及ぼすものではない。それは、あると信じた人の心の中のみ生きて、それ以上増殖しない性質のものだ。その意味でこれはきわめてステイックな記憶と言える。従って、当然ながらその記憶は人の視線を未来に向かって解き放つ管もなく、過去の一点にとどまらせたまま離さない。結局スマルノフはその記憶の消滅とともに、自らの死を選ぶしかなかった。

さて、この「犬の記憶」という撞着語法は同じく矛盾をはらんだナボコフの「未来の記憶」будущее воспоминание という語を思いおこさせる。かつて論じたことがあるが⁹⁾、ナボコフの初期短篇の一つ『ベルリン案内』Путеводитель по Берлину (1925) は「僕は誰かの未来の記憶を見ているのだと、どうして彼にわかってもらえようか¹⁰⁾」という奇妙な言葉

で閉じられていた。この「未来の記憶」とは、語り手たちのいるビヤホールを隣の部屋から眺める子供に関して言われているが、要するに、この子供が将来大人になった時、きっとこの騒々しいビヤホールの光景を思い出さだろう、記憶しているだろうという推測を表わしている。即ち、本来現在にあって過去を思い出すべき記憶の枠組をそのまま未来に移して、未来から現在（未来から見れば過去）を思いおこすこととした訳だ。つまり、意味としてはさして突飛なことを言っていないが、それをこのような撞着語法で表現したところに珍しさがあると言えよう。

そして、この「未来の記憶」も同様に考えて見れば、その子供が持っているというよりはむしろ、語り手が子供に持つことを期待する一つの概念と言えるだろう。更に、おそらくは将来ともその記憶は語り手に伝えられはしないという点で、「犬の記憶」と共通性を持つ。しかし、こうした共通性にもかかわらず、両者の相違もまた大きい。「犬の記憶」はその消滅とともに、スミルノフ自身の存在基盤を失わせ、スミルノフの死へとつながった。しかるに、語り手が子供に託した「未来の記憶」は、たとえ子供の成長とともに消え失せたとしても、現在において既に語り手に一定の作用を及ぼしてしまった。即ち、それは語り手に現在の出来事を未来の視点から見る、現在の何げない出来事に未来の光をあてて今まで見えなかった側面を見るという、一種の芸術家としての方法の覚醒を呼びおこした。とすれば、この「未来の記憶」は、「犬の記憶」がスタティックだとしたら、むしろダイナミックなものと言えよう。言いかえれば、「犬の記憶」が過去の中で閉じられているのに対し、「未来の記憶」は文字通り未来に向かって開かれている。

ところで、このことは見方をかえれば、『鉄のロード』の主人公スミルノフは、結局ベシミスティックに空しく待つことしかできない人物だったことにつながる。彼にとって過去は、そこで現在を動きのとれないままに凍らせる源であって、その凍りついた現在をとかすものはおそらく奇跡しかない。そして、この姿勢は、後にインタビューに答えて、「想像力は記憶の一形態」であり、「記憶も想像力もともに時間の否定¹¹⁾」だと語り、記憶にダイナミックで能動的価値を求め続けたナボコフの姿勢からは峻別されるものに違いない。『鉄のロード』の与えるやりきれない、行き場のない重苦しい雰囲気は、記憶をめぐる両作家の姿勢の違いにも求められる。

もちろん、この時期のガスダーノフの短篇すべてがベシミスティックな結末を持つ訳では決していない。例えば、先に触れた『幸福』では、失明という悲しい運命にみまわれたアンリが最後になって、「私が生きていて、考え、何でも好きなことができるのが重要なんだ。そしてほら、子供の頃から私の背後に立ち昇っていた幸せの雲のようなものが、遠くから私のところまでやって来て、私や私の親しい人たちを包んでいる。そして、この幸せな霧に対しては一切が無力で、一切が不必要で滑稽なんだ」(стр. 201-202) と一種の悟りを見出して、幸福の讃歌を歌っていた。しかし、その幸福の一つの源は忘れることにありはしなかったか。ある夢の後でその悟りに達した日、妻の声には彼女の恋人が来た晩に彼女が示したのと同じ独特のイントネーションが見られた。「しかし、ドランはこれを覚えていなかった」(стр. 201) と作者は何げなく語る。つまり、ここでは不幸の源を忘れ去ること、それがアンリ・ドランの新しい幸福の原因であることが暗示されている。とすれば、ここでもまた記憶は幸福の源とは程遠く、むしろ記憶を失うことが人の運命を未来に向かって開くことにつながっ

ていると言えるだろう。そして、おそらくは『鉄のロード』のスマルノフも「犬の記憶」を忘れ、ベテルブルグでの不幸な一夜を忘れることができたなら、違った運命をたどれたのかも知れない。

これに対して、同じ幸福の讃歌でも、ナボコフの初期短篇の一つ『ロシアへの手紙』Письмо в Россию (1925)の最後のトーンはいささか異なっている。8年前に別離した恋人にあてて語り手はこう書いている。

「聞いておくれ、僕は心底幸せだ。僕の幸せは呼びかけた。通りや広場や運河に沿った河岸通りを散歩して、穴のあいた靴底からぼんやりと湿気の唇を感じながらも、僕は説明し難い幸せを誇らかに担っている。何世紀も過ぎて、生徒たちが僕らの動乱の歴史にうんざりしようと、一切が、一切が過ぎて行こうと、いとしい友よ、僕の、僕の幸せは残るだろう。街灯の湿った映りの中に、運河の黒い水へと下って行く石段の慎重な曲がり方の中に、踊っているカップルの微笑みの中に、そして、神がこれほど惜しみなく人の孤独に対して恵んでくれるあらゆるものの中に¹²⁾。」

なるほど、ここには記憶という語は用いられていない。しかし、この幸福の讃歌の全体的なトーンが、明らかに未来に対して開かれていることは否定できないだろう。『幸福』のアンリ・ドランの幸福感も、『ロシアへの手紙』の語り手の幸福感も、ともに定かには説明できないある種の感覚をきっかけにしていることは共通しているし、『ロシアの手紙』の冒頭部分にも、「過去を思い出さない¹³⁾」という言葉があることは、二つの短篇の親近性を示すものかも知れない。しかし、「あらゆるものの中に」「僕の幸せ」が「残るだろう」と語るその口調は、隣室の子供について、「彼はここにあるものすべてにとっくに慣れてしまっ、僕たちが近くにいてもとまどいはしない。でも、僕は一つだけ知っている。人生において何がおおころうとも、幼年時代に毎日スープを飲ませてもらう部屋から眺めた光景を、彼は永久に覚えているだろうことを¹⁴⁾」と、その子供の「未来の記憶」について語る口調と平行をなしていることもまた否定できまい。ナボコフの二つの短篇の語り手の幸福感の根底にあるものは、疑いもなく、現在という瞬間が未来という時の中で、また新たな輝きを持ちうるだろうという確信であり、未来という光源から現在を照らすそうした視点は、ガズダーノフの短篇には全く無縁のものだろう。もしここに引いたナボコフの短篇世界がオブティミスティックに見え、ガズダーノフの短篇世界がペンミスティックに見えるとしたら、その理由の一つはここに求められる。そして、違いの原因のもう一つは、おそらくここに引いた二つのナボコフの短篇が若き芸術家の覚醒とかかわっているのに対し、少なくとも今論じたガズダーノフの短篇は芸術創造の問題とは無縁なことに帰せられよう。ただ、一言断わっておけば、ガズダーノフは決して芸術創造を主題とした（『リカルディの失踪』のように芸術家を主人公にしたという意味ではなく、主人公が芸術家であろうがなかろうが芸術創造を中心テーマとしているとの意味で）小説を書かなかった訳ではない。否、これまで特に触れなかった短篇『第三の生』は芸術家の意識、芸術家の覚醒の問題に正面から取り組んでいるのだから。

『第三の生』は「ロシアの意志」に掲載された作品群で言えば『変貌』Превращение (1928)に最も近く、専ら語り手の内面に沈潜した難解な短篇だが、Dienesはこの作品についてこう語っている。

「第一の生は子供の生、第二の生とは大人の外面的生活であり、第三の生、それだけが真にリアルで本質的な生、これに比べれば他の生は虚気楼に過ぎない生とは、想像力の生、個人が自分に恵まれた限り最高の存在（と認識）のレベルに達しようとするような、心理的、精神的に創造的な生である¹⁵⁾。」

つまり、第三の生を新たに始めるとは、これまでの通常の生活では知りえなかったような、創造的な内面の世界へ入り込むこと、いわば芸術創造も可能になるような世界に入ることを意味する。その意味では、この短篇こそナボコフの初期に特徴的な、芸術家の覚醒を扱った短篇群に最も近い筈だが、一読した感じでは決してそうは思われない。むしろここに一貫してうかがえるのは、何か不思議な感覚であって、「私は前の晩の事件を覚えていないし、何故この通り——あとでどこか見つけようとしても無駄だった——に来たのかも覚えていない。ただ、何歩か歩いた後、意識を失ったことだけが、疑いようもなくはっきりとわかっている」（1932-50, стр. 207）といった調子に、記憶ばかりか意識までも混濁した世界が縋々とつづられている（Dienes はこの作品が、フリーメーソンの視点から解釈できる可能性を示唆している¹⁶⁾）。言いかえれば、この明らかに自己分裂を見つめた¹⁷⁾半病理学的の作品もまた、自己覚醒を扱いつつも、未来に開かれた印象を与えない。むしろ、現在という時の中での「世界の異なった見方」（стр. 209）、「存在の多様性」（стр. 219）を求めて内向する視線は、過去とも未来とも断絶した奇妙な共時的感覚を暗示しているように思われる。

ところで、こうした芸術家の主人公の内面の不思議な感覚を扱った作品はナボコフにもあるが、その代表は『重たい煙』 Тяжелый дым (1935) だろう。この短篇についてもかつて論じたことがある¹⁸⁾からここでは詳しく繰返さないが、その主人公も不思議な意識の分裂感覚を味わいながら、最後には詩が生み出る喜びで終わっている。語り手は言う。「しかし、どうでもいいことだ。今や僕はまだ凍りつかない、まだぐるぐる回っている詩のうっとりさせるような予感を信じている。顔は涙で湿り、魂は幸せで引きちぎれんばかりだ。そして、僕は知っている。この幸せが地上にある最高のものだ¹⁹⁾」と。更に言えば、このような主人公の覚醒に、ここでも「未来の記憶²⁰⁾」がかかわっている。そして、この執拗なまでの現在の未来への投影と、それに引き続く幸福の讃歌は、疑いもなくナボコフの関心の有り様を示しており、繰返せば、それはガズダーノフの短篇世界とは全く異質のものだ。比較のために、『第三の生』の結末部を引こう。

「私が意識を失ったあの夜、カフェのテラスで見知らぬ女性と出会ったあの晩、私は思いがけない力でこの氷のような触覚を感じた。そして、残ったものといえばただ、熱い空気の中で私の眼前間近に立つ女性の顔、私の人生のわきを通り過ぎて行く影のように冷たく静かな流れだけだった。」（стр. 223）

Dienes はこの女性像を「ミューズ、もしくは芸術、想像力、創造性の人を引き寄せる方のシンボル²¹⁾」と解く可能性を指摘して、この結末が「詩人の誕生、ためらいと沈黙からの解放、その女性が支配者であるような共時的に生きられる第三の生への永久の移行²²⁾」を意味すると論じているが、それにしても同じ詩人の誕生を歌った『重たい煙』とのトーンの違いは明らかだろう。ここでもまたガズダーノフ短篇の主人公の覚醒は未来への開かれた視点

を感じさせず、凍りついたスタティックな様相を呈している。

さて、以上繰返し述べてきたナボコフの短篇世界とガスダーノフの短篇世界の相違を今一度整理するために、次に『リカルディの失踪』の前半部分を眺めてみよう。興味深いことに主人公のリカルディもまた、『第三の生』の語り手のように、尋常ならざる感覚にめぐまれている。彼は春の日などにしばしば「日光が冷血動物に作用するように」、「自然や風や空気の特別の匂いが、疑いのない力で自分に働きかける」(1931-45, стр. 189) のを感じる。そして、このような精神状態が訪れる時、短い間ではあるが彼は「自分を取り巻いているのに、単純な眼からは見えず、他の人たち皆には理解できないでいるあらゆることに対する突然で悲しい理解の能力」(стр. 189) が備わってくるのを感じた。更に、そうした不思議な感覚の「記憶」さえあれば、演奏会の場で人を魅惑する才能を発揮できた。その意味で、この感覚の記憶は、現在ある彼の芸術的才能を支えるものとも言える。しかし、彼の記憶は必ずしも支えとなるばかりではない。それは時として、「彼の意志に服従しなくなり」、「彼の願望に反して」、彼が「考えたくもない領域にかかわる一連の思いを引きずって」(стр. 190) きてしまう。その点からは、リカルディにとって記憶は同時に不安の源でもある。そして、そうした不安を呼びおこす記憶の一つが、ギルダという女性をめぐる友人グリリエとの三角関係だったが、最後には今は風土病専門の医師となったグリリエからハンセン病の最終宣告を受ける形で、その漠然とした不安は思いがけず現実のものとなる。つまり、ここでも記憶はただ人の現在を支えるばかりでなく、現在を崩壊させる一つの要因ともなっており、おそらくは記憶を捨て去ることが、人の幸福を招く最良の策なのだろう。たとえその幸福が創造的生活とは無縁な、現在を生きるだけのものだとしても。

これに対して、ナボコフにあっては記憶とは過去、現在、未来の三つに分かれた時間をその力で重ね合わせることであり、それは『チョールブの帰還』 Возвращение Чорба (1925) のように、主人公が芸術家とは無縁の人物だったとしても、現状打破的なポジティブな意味を持つ(チョールブの場合は、不慮の事故でなくなった新妻の面影を、彼女との新婚旅行の記憶をたどることで取り戻そうとする)。言いかえれば、ナボコフ小説の主人公たちは記憶という武器を用いて行き場のない現実からの出口を探るのであって、記憶を捨て去ることはむしろその戦いの放棄に他ならない。同じように記憶に固執したナボコフとガスダーノフの姿勢の違いはこのように大きい。

もちろん、以上検討してきたわずかばかりの短篇をもとに、ナボコフの作品世界はポジティブでオプティミスティックであり、ガスダーノフの作品世界はネガティブでベシミスティックだと説いたとしたら、それは速断に過ぎよう。しかし、パリに居を構え、「パリ派」と総称される若い世代の小説家、詩人たちとつながりが深いガスダーノフが、「パリ調」 парижская нога と呼ばれる。死を賛美するニヒリスティックでベシミスティックな風潮と無縁でなかったのも事実だろう。そして、この傾向がここで眺めた1930年代前半の短篇小説にうかがえるとしても、文学史的には少しも不思議ではない。むしろ、ロシア亡命文学の中心地パリからは離れてベルリンに居を構え、後にガスダーノフから「若い亡命文学とは何のかかわりも持たない²³⁾」と評されたナボコフこそ、意識的にパリ派と距離を置こうとしていたに違いない。ナボコフとガスダーノフの作品世界のきわだった相違はこうした地域性にも求められよう。

以上、ガイト・ガズダーノフが「ロシアの意志」を中心に作家活動を始めた時期の9つの短篇を検討した前稿をうけて、本稿では「現代雑記」に活躍の場を移した後の4つの短篇を概観したが、そこに新たなテーマの展開を見ることはできなかった。Dienes は『幸福』を「ガズダーノフの最良の作品の一つ²⁴⁾」と評して、この時期の短篇も依然として高く評価しているが²⁵⁾、『リカルディの失踪』と『水の牢獄』Водяная тюрьма (1930)を比べて、後者を「はるかにずっと力強い²⁶⁾」と断じたノヴィクの言のように、この時期のガズダーノフの短篇には初期に見られた潑刺さが失われ、プロットの意外性に引きずられたり、意識の彷徨の注視にのめりこみすぎたりする傾向が見られる。ここではまだ1930年をもってガズダーノフの創作活動の頂点とまで断定することはできないが、1935年「現代雑記」59号で置かれた位置とはうらはらに、以後ナボコフとガズダーノフは明暗をわけた対照的な歩みをたどるように思われる。だが、その評価を下すためには、前稿で触れなかったガズダーノフの長篇群にも眼を向ける必要がある。それが次にわれわれに残された課題と言える。

註

- 1) Постников, С. О Молодой эмигрантской литературе, Воля России 1927-5/6, стр. 221.
- 2) ナボコフの詩に関して言えば、同じく1927年に「大学の詩」Университетская поэма が「現代雑記」に掲載されている。
- 3) ナボコフの場合と同様にガズダーノフにあっても「現代雑記」の編集者フォンダミンスキイとの個人的知遇がきっかけとなっている。cf. Dienes, L. Russian Literature in Exile: the Life and Work of Gajto Gazdanov, München, 1982, p. 90.
- 4) 拙稿「『現代雑記』(ソヴレメンヌイエ・ザピースキ)とナボコフ」, 「スラヴ世界と「西欧」」(科学研究費による研究成果報告書), 1981, p. 17参照。
- 5) 拙稿「ガイト・ガズダーノフと「ロシアの意志」——『黒い白鳥』を中心に——」, 「人文科学論集」23号, 1989, pp. 159-168.
- 6) cf. Dienes, *op. cit.*, p. 101.
- 7) cf. Pachmuss, T. (ed.) A Russian Cultural Revival: a Critical Anthology of *Emigré* Literature before 1939, Knoxville, 1981, pp. 312-313. Струве, Г. Русская литература в изгнании, Paris, 1956, стр. 292.
- 8) cf. Dienes, *op. cit.*, p. 62.
- 9) 拙稿「ナボコフの初期短篇と芸術家テーマ」, 「ロシア文学論集」5号, 1981, pp. 6-7 参照。
- 10) Набоков, В. Возвращение Чорба, Ann Arbor, 1976, стр. 102.
- 11) Appel, A. An Interview with Vladimir Nabokov. In Dembo, L. S. (ed.) Nabokov: The Man and His Work, Wisconsin, 1967, p. 32.
- 12) Набоков, указ. кн. стр. 48.
- 13) Там же, стр. 43.
- 14) Там же, стр. 101.
- 15) Dienes, *op. cit.*, p. 97.
- 16) Ibid., p. 100.
- 17) см. 1932-50, стр. 208.
- 18) 拙稿「芸術家の恐怖——ナボコフの初期短篇の世界から」, 「人文科学論集」21号, 1987, pp. 98

-102参照。

- 19) Набоков, В. Весна в Фиальте, Ann Arbor, 1978, стр. 83.
- 20) Там же, стр. 82.
- 21) Dienes, *op. cit.*, p. 98.
- 22) *Ibid.*, p. 100.
- 23) Газданов, Г. О Молодой эмигрантской литературе, Современные записки 1936-60, стр. 232.
- 24) Dienes, *op. cit.*, p. 95.
- 25)ニコライ・アンドレーエフは『幸福』を「まのびしていて統一を欠く」と厳しく評価している。
см. Андреев, Н. 《Современные записки》 Книга XLIX, 1932 г. - Часть литературная),
Воля России 1932-4/6, стр. 185.
- 26) Новик, А. Журнальная беллетристика («Современные записки», No. 45), Воля России 1931-3/4, стр. 378.